

お正月新聞

—2026年号—

創刊号

VOL.1

L
十

令和8

2026

干支縁起オブジェ
富宇加淳・作

m9デザインのお正月新聞創刊。

あけましておめでとうございます。本年もかわらぬごひいきのほどをよろしくお願い申し上げます。

さて、近年の年賀状トレンドは、「本年をもちまして、年賀状でのご挨拶は終了させていただきます」と、年賀状終了のお知らせを一言添えたもの。とりわけ法人の方々からのこの終了のお知らせは年々増え、当然、送られてくる年賀状も年々減っています。

なるほどこれはいへんだ、この流れにはのらないと。つまり2026年の弊社年賀状も、これを宣言して、最後の年賀状にしようと考えました。

でも待って、新しいものには、すぐにのりたいたいおっちょこちょいが信条の弊社としては、この流れにのるには遅すぎませんかという、いかにもアホな意見。いやいやだからね、たとえ経費削減の体のいい口実であれ、これは環境問題でもあるし、企業としてはその意識の表明でもあるわけでしょ。だったら、早いも遅いもないし、気づいた人からやめていこう。そういう問題ですよね、と、ホツとする正論も。

など、喧々諤々の会議の末、ビールを飲みながら決まったのが、この「m9デザインのお正月新聞・創刊」。環境的にはより険しい、カーボン増加の特大紙面。つくづく申し訳ありません。理由は、やはり面白そう。加えて、弊社のふざけた年賀状を楽しみにしているという声もあったりなかったり。いずれにしても終わりは、さびしいじゃない。ということとで、この試み、せめて、僕らのみならず読まれる方にとっても、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。つまり、弊社のフィジカルな年賀状は続く。

目次

【m9デザイン誕生秘話】

弊社設立のキーパーソンリキさんと語るm9デザインのこと
感謝感動！10年クライアント【第1回】ラッパ屋さん
頼りにしてます！m9dの仲間たち ●校閲の高松恭則さん
4コマ漫画「エムキュウくん」

編集後記

設立21年目記念
m9デザイン
誕生秘話



弊社設立のキーパーソン
リキさんと語る
m9デザインのこころ

リキさんこと、鈴木力さん。集英社の名物編集者として2006年に退社されるまで、『月刊明星』、『月刊PLAYBOY』を経て、『週刊プレイボーイ』、『イミダス』の編集長を歴任、まさに『雑誌ジャーナリズムの黄金期』を駆け抜けて、さらに『集英社新書』の立ち上げと、その経歴は輝かしい。などと言うと「やめてくれ」と仰るに違いありませんが、退社されて20年の今なお、各方面からひっぱりだこの「みんなのリキさん」です。近年は、鈴木耕のお名前で『デモクラシータイムズ』や『マガジン9』などのウェブメディアで活躍中。そう、弊社、「m9デザイン」は、そんなリキさんによって生まれたと言っても過言ではないんです。ということと、当時の懐かしい、いきさつを、昨年80歳を迎えられたリキさんとご飯を食べながら、あらためて。

まずは、1989年、初めてのリキさんとの仕事、単行本、『荒俣宏 日本妖怪巡礼団』の装幀の話から。



※1 荒俣宏 著『日本妖怪巡礼団』1989年・集英社

リキさんとの出会い
『日本妖怪巡礼団』

m9デザイン(以下m9d) どうですか80歳。
リキさん(以下R) 思ったよりインパクトあるね80歳は、「えっ、ハチジューですか!」みたいな、急に気を遣われたりしてさ(笑)。

m9d はじめてお会いした時、リキさんは、『週刊プレイボーイ』(以下『週プレ』)の副編集長。すごい大人に見えましたけど35年前、つまりリキさんが45歳! 僕らも20代。1989年、昭和が終わって平成がはじまった年です。

※僕らとは、m9d創立メンバー、
芹沢、富宇加、小林のこと

R そうか、天皇崩御。『週プレ』もグラビアのヌードを自粛したりしたね。ベールの壁が崩壊したり、天安門事件があったりと、なかなかの年に会ったんだね。

m9d リキさんの第一印象は、会ったことのない大人でした。こんな大人がいて、こんな大きな会社で出世もされてる。世の中、捨てたもんじゃないじゃん、えらそうですが、ほんとにそう思っただけですよ。

R たしか、水野くん^{※2}の紹介だよ。m9d はい、水野さんに連れられて『週プレ』の編集部に。で、初めていただいた仕事が、『荒俣宏 日本妖怪巡礼団』の装幀。これ使ってねと渡されたのが、夜桜の写真。

R うん、その夜桜の写真を本のカバー全面にグルッと巻いたデザイン、あれは新鮮だったよ。

m9d デザイン案を持って編集部にいったときのことをよく憶えています。リキさんが「よ!」って仰ってそのまま、当時、平凡社に籠もって仕事をされていた、著者である荒俣さんを訪ねたんですよ。

夜も遅い時間でしたが、荒俣さんにデザインを見ていただきながら、江戸時代からの「図案」についてのうんちくを一晩中、外が明るくなるまでうかがいました。荒俣さんが「本の帯を外したら幽霊が隠れてたりしてね」「みたいなアイデアも出されたりして、不思議で楽しい時間でした。

R そうか、そんなことあったね。

m9d もはや、デザイン意図も忘れましたが、河原で拾ってきた石を金色に塗って、その石の撮影のためだけに集英社のスタジオで何時間も費やしたりして、本当に好き勝手にやらせていただきました。

R この本と言えばね、なんと言っても誤植の思い出。本表紙(カバーを外した、本体の表紙)のタイトルルの文字。「巡礼団」の「礼」が「霊」で刷られてしまった。「巡礼団」じゃなくて「巡霊団」。本のタイトルルだよ、誰に指摘されたのかは忘れちゃったのだけど、汗タラリ。そこで、僕が言ったのは、「あ、気づかれました?」

※僕らとは、m9d創立メンバー、
芹沢、富宇加、小林のこと



やっちゃってます。

m9d 確かに荒俣さんっぽいイタズラ感ありますもんねって、チェック漏れとはいえ、本当にすみません。。
R でもね、この仕事で、君らのこと、面白い子たちだなあって思ったんだよね。

『パピルス』創刊の
お手伝い

m9d 僕らは当時、「ファイブ・ワン」^{※4}というデザイン制作会社に属していた、メインの仕事は、広告代理店を挟んだ企業の広告系でした。だから、ときどきリキさんからいただく本の仕事は、新鮮で楽しかった。

そんな流れでお願いされたのが、『パピルス』のデザイン。1992年。僕らもリキさんとの仕事の中で、最も印象深いのがこれです。全160ページ、しかも創刊号をまるっと駆け出しの僕らに任せるって、当時はただ楽しいだけでしたけど、あらためて考えると、ちょっと震えます。

R 『パピルス』は、もちろん僕も印象深い。僕が副編集長だった当時の『週プレ』は、けっこう売れていたんだけど、グラビアとか若い男性向けコンテンツだけでなく、政治や国際情勢の記事なんかもそれなりにあったわけ。で、読者アンケートを調べると、そうした、いわゆる堅めの記事がじつは多く読まれていたし好評だった。そもそも、そのテの記事をつくりたい僕は、それがこれだけ読まれているのならば、調

子にのって立ち上げたのがこの『パピルス』創刊の企画なんだよね。

m9d スマホどころかガラケーもなく、なによりインターネット以前ですが、『創刊の言葉』や目次は、今読んでもリキさんらしさが滲んでいて、ちっとも古くないですよ。

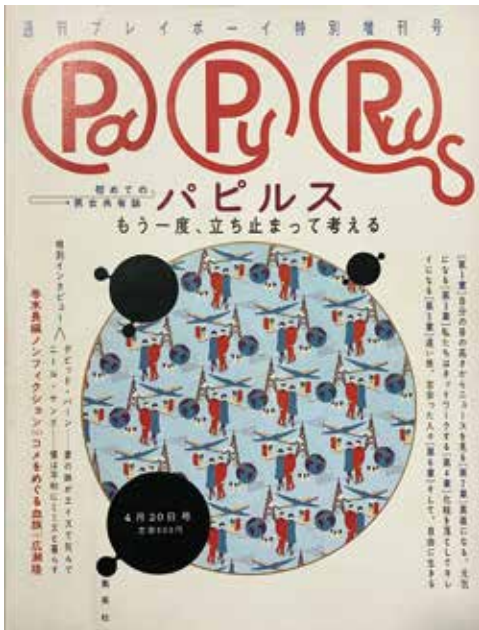
R そう? でも、確かにやろうとしたことは新しかったかも。

m9d デザインで言えば、表紙こそ紛糾した記憶がありますが、中ページにおいては、リキさんにダメ出しされた記憶がまったくありません。久しぶりにあらためて見て、良くも悪くも、よくこんなことが出来ていたなと思っています。

R いや、デザインやレイアウトも斬新だったよ。普通、雑誌のレイアウトと言えば、だいたいが基本のテンプレートにはめていくじゃない。それがもう記事ごとにまったく異なるというね。

m9d そもそも雑誌の作り方をよくわかっていなかったということもあると思いますけど(笑)。

R まあ、でも、売れなかったんだこれが。いろいろな事情もあったけど、2号目は出なかった。



- もくじ
- 第1章 自分の目の高さからニュースを見る
 - 第2章 素直になる・元気になる
 - 第3章 私たちはネットワークする
 - 第4章 化粧を落としてキレイになる

巻頭の「パピルスの考えていること」から普通の人たちが、普通の町で、普通の暮らしをしている。私たちはそんな人たちのために雑誌をつくりたいと思っている。そんな人たちと一緒に雑誌を作っていきたいと思っている。



- 第5章 遠い旅、出会った人々
- 第6章 そして、もっと自由に生きる
- 巻末長編 ノンフィクション
- 「コメをめぐる血族」広瀬隆



『気が癒やす』
1992年
週刊プレイボーイ別冊 集英社ムック



板橋雅弘 著
『夢のいる場所』
1990年 集英社

僕らがお手伝いした
リキさん関連の本

→当時の会社の名刺デザインをTシャツに。写真:馬場道浩さん



※4「ファイブ・ワン」
株式会社ファイブ・ワン。弊社創立メンバーである、芹沢、富宇加、小林が、1989年から15年間在籍していた会社。得体の知らない人たちが出入りして、徹夜はかりの日々は何だったのか。でも楽しかったのは事実。でたまたま僕らを目を細めて受け入れ続けてくれた佐藤龍郎社長。昨年、ほぼ30年ぶりの人たちに、そんな佐藤社長を囲む会を開催(写真左)。



※2「水野さん」
水野義和さん。当時、集英社「月刊明星」の編集者で、僕らの仕事を目にとめて声をかけてくれた方。アイドル系の仕事を沢山させていただきました。2022年のご逝去はいくらなんでも早過ぎました。左は、水野さんとの印象深い仕事、田原俊彦写真集「祝日」(1989年)。

m9d そのへんの事情については、リキさんの著書『集英社放浪記』※5に詳しいですが、僕らも残念でした。それまでは合間仕事だった書籍の仕事でしたが、『パピルス』には、時間を全振りしてましたから。僕らも静かにいつもの仕事に戻っていった記憶です。

R 君らには別の書籍を何冊か手伝わってもらいながら、社内的にはその第2号発行の許可を待ったけど、それはかなわなかった。

m9d でも、これは言っておきたいのですが、こうしたリキさんとの本の仕事を通じて、世の中を見る感性、もつと言えば、常に弱い人の側に立つというリキさんのセンスに僕らは大きく影響されました。世界やニュースの見方をリキさんから学んだというか、当時の僕らの世代にありがちな、やや冷笑的で露悪的なノリの無意味さに気づかせてもらったし、直接、何かを言われたわけではないですが、リキさんの言葉や姿勢に触れながら、そうした感性への共感が自然に膨らんでいた気がします。

路頭に迷う僕たち、リキさんからの電話

m9d さて、2004年の末、僕らが属していた会社(ファイブ・ワン)が経営難に陥ります。社長の人柄に甘えて、いい年をした僕ら自身の働き方にも反省がありましたし、社長に相談された僕は、会社を辞することに。

文字通り頭を抱えていた、まさにその頃。リキさんから「飯でも食おうよ」の電話です。

R 憶えてるよ。半蔵門のダイヤモンドホテル。食事の後、君らとこのカフェでお茶をしていたら、なんだか急に深刻な話を始めてさ、かと言って相談されるわけでもなく、聞くとともに聞いてちゃったんだな。

m9d 僕らもテンパってたんでしょね、リキさんそっちのけで話を始めちゃったんですね。

R うん、もう僕にしたらさ、なんだ、なんだ、どしたって感じ(笑)。

m9d ほんとにすみません。で、その頃、同時にリキさんから相談されていたのがWEBマガジン「マガジン9条」※6以下マガ9。このデザインをやってほしいと頼まれていたこの件が、僕らを救ってくれることに。

R 『マガ9』ね。これは、集英社の仕事とは無関係なんだけど、定年の2年前(株)カタログハウスの斎藤駿社長(現・相談役、それから当時の国立市長の上原公子さんと僕の3人で、その時の首相、小泉純一郎に沸き上がる世論を憂いて、この流れは看過できないって始まった企画。そのためのメディアをつくるう、それもWEBでっていうね。

m9d その打ち合わせのために、ときどき通っていたのが、新宿南口の小さなビルの一室ですよ。

R その部屋は、カタログハウスの斎藤さんが『マガ9』の活動拠点として用意したんだけど、君らの事情を斎藤さんに伝えると、そんなことなら彼らに、ここに常駐してもらって『マガ9』をやってもらったらいじゃないか。

いとなったんだよね。

m9d 他の仕事もそこですればいいからと、電話でそのことをリキさんから聞いて、「こんなことある？」と、みんな顔を見合わせて驚きました。

その部屋は、仕事ができる十分なスペースがあって、机や椅子はもちろん、電話、複合機、ネット回線と、オフィス機能のすべてがありました。加えて家賃、僕らのギャランティ、その費用の一切が『マガ9』の制作・運用費という事で用意されたんです。すべてが一気に一瞬で解決しました。これは、僕らが自立して新宿御苑前にオフィスを構えるまでの3年間続きます。

R いや、よく考えるとすごいね。

m9d これは本当にすごいことなんです。あと、斎藤さんには、カタログハウスの発行誌である『通販生活』のお仕事もさせていただきました。その際、とてもよく憶えているのが、斎藤さんに、僕らのことをよく知らないでしうからと、これまでの実績というかポートフォリオ的なものを持ってきましようかと言ったときのこと。そこで斎藤さんが仰ったのが、「君ら、リキさんの紹介だろ、要らないよそんなの」って。どう、リキさん。

R さすが俺が(笑)

m9d とにかく国立市(斎藤さんがお住まい)に足を向けて寝られませんか。ところが、斎藤さんは、そんなことは忘れたかのように、まるで口になれないし、オモテには、なかなか出てこない方。そんな斎藤さんの感じは大好きなのですが、機会をとらえて僕らなりの感謝を表現しています。ぜんぜん足りないんですけど。

2005年3月、マガジン9条公開 同年6月、(有)m9デザイン設立

制になり現在に至ります。

R でもどうして(株)じゃなくて(有)にしたの？

m9d ですよ。当時、会社法の改正で、1円から「株式会社」がつくれるという事で、(株)でも良かったのですが、同時に「有限会社」という制度が削減するという話を聞いて、じゃあ、(有)か。なんでしょう、か、そういうへんな距離の取り方が僕らのズレたところですよ。

R いやでもさ、時流に乗らないというか、その距離感が君らの良いところだと思ふな。僕としてはずっと変わらずに、このまま行っていきたいよ。

これからも

m9d ありがとうございます。

それにしても、この「弊社誕生秘話」、引いて見れば、僕らの積極性は皆無。ただただ流されて、困ったら助けられたという、いかにも僕らしい顛末ですが、あらためて皆さんへの感謝しがあります。

おかげさまで、理解あるクライアントの皆さんに恵まれて、なんと21年目に突入しました。僕らも定年世代になりましたが、皆さんにあてにされる限りがんばる所存です。

R そうだよ、それでいいこう！

m9d リキさんはその後、今やフォロワー25万人を超えるユーチューブチャンネル「デモクラシータイムス」※7の立ち上げに参画され、司会をされる番組を時々見えますよ。あと、最近のリキさん情報としては、昨年8月、毎日新聞のインタビュー記事「オー

※6「マガジン9条」毎週更新のウェブマガジン。現在の名称は「マガジン9」。すっかり老舗の市民派メディア。リキさんは立ち上げ以来、鈴木耕のお名前を連載中。弊社は、立ち上げから現在に至るまで、デザインと運用のお手伝いをしています。

※7「デモクラシータイムス」登録者数25.7万人のユーチューブチャンネル。リキさんは、鈴木耕さんとして、複数の番組の司会を担当。弊社は、ロゴマークや名刺、手ぬぐいなどのグッズづくりをお手伝いしています。



2018年、忘年会の写真から

鈴木力(すずき つとむ)／鈴木耕(すずき こう)

1945年、秋田県生まれ。早稲田大学文学部文芸科卒業後、集英社に入社。『月刊明星』『月刊PLAYBOY』を経て、『週刊プレイボーイ』『集英社文庫』『イミダス』などの編集長。1999年『集英社新書』の創刊に参加、新書編集部長を最後に退社、フリー編集者・ライターに。著書に『スクール・クライシス 少年Xたちの反乱』(角川文庫)、『目覚めたら、戦争』(コモンズ)、『沖縄へ歩く、訊く、創る』(リベルタ出版)、『反原発日記 原子

私説 集英社放浪記

2018年、河出書房新社

マガジン9

No WAR

「マガジン9」とは、から抜粋憲法と社会問題のことをやります。“9”が示す通り、ずばり憲法9条のことから始まりました。日本国憲法と私たちの生活のつながりについて考えたり、憲法に関わるさまざまな出来事や議論について、広く伝えるためのウェブサイトです。

Democracy Times

デモクラシータイムス

チャンネル説明から抜粋

世の中、どうなっているの？いろいろなニュースはあるけれど、それってどういうことなの？と思うことはありませんか。私たちは、大きな力を持たない人々の側で、世の中の変だ、おかしい、を解明していきます。

※8 毎日新聞夕刊「特集ワイド」2025年8月15日掲載

オールドメディアよ 頑張れ

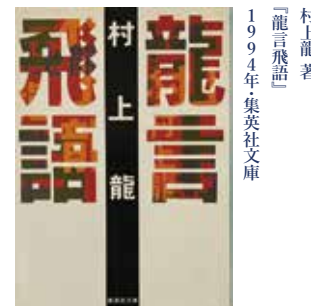
フリー編集者 鈴木耕さん

リキさんは、ピーマンが大きい。

リキさんはピーマンが小さいです。なにかの比喩ではありませんが、ただただ、ふつうにピーマンが小さいなんです。一緒に一緒におなじみの中華料理店では、何も言わなくても、すべての料理からピーマンが除かれて出てきます。ですから、ほぼピーマン炒めでもある「青椒肉絲」は決してオーダーできません。じつは、もつと生魚も苦手。つまりは、お刺身、すなはち、お寿司も！

リキさんにとって僕らは、ずっと腹を空かせた貧乏デザイナー。「飯でも食おうよ」と誘われれば、ごっちゃんですと常にごちそうになってきたわけですけど、どうですか、お寿司が苦手。考えられませんが、優しくて寛容で教養の人、キングオブ大人、それがリキさん。そこは、大人げないなあと思っています。

イラスト Jun Tomioka



！感謝感動！
10年
クライアント

【第1回】

劇団『ラッパ屋』さん

10年を超えるお付き合いのお客さま、感謝を込めてご紹介するふりをしながら、弊社を存分に褒めてもらおうというこのコーナー。栄えある？第1回は、10年どころか30年超えのお付き合いの『ラッパ屋』さん。ウェブサイトや毎年恒例の紀伊國屋ホール公演の宣伝美術をお手伝いしています。大人のエンタテイメントを、目指し、長きにわたり各方面で活躍中のラッパ屋主宰の鈴木聡さん。お忙しい中、無理くり寄稿をお願いしましたら、僕らの実像を超えて流石の筆が走ってます(笑)

長くつきあえるデザインを、この人たちは生んでくれる。

ラッパ屋主宰 鈴木聡

あれは1993年の春のこと。当時、私は広告代理店のコピーライターで、社内にはまだバブルの残り香が漂っていた。何かの用事で営業局を覗くと、顔見知りの局員が色校正刷りをチェック中である。某得意先のパンフレットらしい。いいね、それ。デザイナー誰？「芹沢さんです。イラストは富士加さん。芹沢氏の事は知っていた。センスはいいが午後4時に出社するので多少問題のある人だった。富士加氏のことは知らなかった。だがそのイラストを見た時、私はピンと来たのである。「これだ。次のラッパ屋のチラシはこの人たちに頼もう」。

かくして私が主宰する劇団ラッパ屋の第16回公演「アロハ颱風」のチラシが出来上がった。右下画像ヤシの木が一本生えた小さ



稽古風景から (写真:木村洋一さん)

鈴木聡(すずき さとし)脚本家、演出家。1959年東京都生まれ。1982年博報堂に入社。コピーライター、クリエイティブディレクターとして活躍。1984年、劇団「サラリーマン新劇喇叭屋(現ラッパ屋)」を旗揚げ、以来全作品の作・演出を担当、「大人のエンタテイメント」を目指し、特に社会人男性の観客層を開拓。演劇のみならず、NHK連続テレビ小説「あすか」「瞳」、テレビ東京「三匹のおっさん」などテレビドラマや映画、新作落語まで幅広く執筆。第41回紀伊國屋演劇賞個人賞(2006年)、第15回鶴屋南北戯曲賞(2012年)受賞。



俳優、脚本家、演出家が主だが、各スタッフ、お手伝いの人たちが力を尽くして一つの舞台が出来上がる。二人はずっと、この33年間にラッパ屋のチームの一員でいてくれたのだ。芹沢氏と富士加氏を信頼できるのは、その仕事単に紙の上(ディスプレイの上)ではないことだ。課題の本質を捉え、クライアントの意向を受け止め、時代の風の変化を繊細にキャッチしながら、その結晶がデザインとなりイラストになる。二人との打ち合わせはいつも楽しい。その言葉やアイデアはいつも私を刺激してくれる。



さて、2026年。しょっぱなから、凝りに凝った年賀状がわりの新聞を作ったのですな。今年もよろしく願います。早速ですが、次のチラシはどうでしょうか？

エムキュウくん

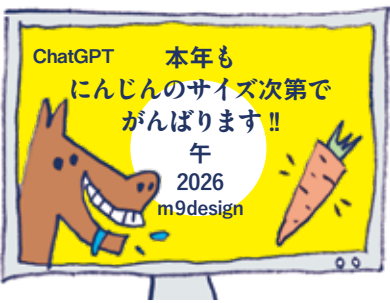
(1)生成AIの巻



エムキュウくん！
今年の年賀状は、
ChatGPTに
頼んじゃおう！



お！
AIに
丸投げ、
イイッスね！



ChatGPT 本年も
にんじんのサイズ次第で
がんばります!!
午
2026
m9design



ウチのこと学習させ
すぎたかな...

原案:ChatGPT5.1 絵:JunTomiuka

頼りにしています！ m9dの仲間たち①

お願いしたら、もう安心。毎度お世話なってます。

みなさん、「校閲」というお仕事はご存じでしょうか？

集英社において校閲者として32年、昨年末、晴れて定年を迎えられた高松さん。あらためて校閲というお仕事のことをうかがいました。

校閲の

高松 恭則さん



学校法人 二松学舎様の
広報誌『學』の制作で毎号
お世話になっています。
高松恭則 1964年千葉県生まれ。
東洋大学社会学部卒業。中日新聞社(東京新聞)を経て93年集英社入社。校閲室室長、部長代理などを務め、2025年定年退職。

ハテナからはじまる文章の品質管理

m9d 最近でこそ「校閲ガール」なんていうTVドラマもありましたが、校閲、僕らも本の仕事をするまで馴染みがありませんでした。いわゆる「文字校正」とはまったく違いますよね。

高松さん(以下高松) いえ、その「校正」の部分もあるのですが、書かれている内容の真偽、固有名詞や年号などの数字の正しさも確認しますし、剽窃、論理的整合性、読みやすさ、見やすさもチェック対象です。体裁を整え、自信を持って受け手に届けられる言葉にする。私たちの仕事は「文章の品質管理」ではないかと思っています。

m9dさまさまざまな出版物がありますが、違いはありますか？

高松 例えば作家さんの文章は、何よりも書いた作家さんのもの。体裁に関しては、こちらは「疑問出し」というカタチで、こうではないでしょうか？と、あくまで「ハテナ」の提案になります。

m9d それが通らないことも多々あるでしょうね。

高松 もちろんです。最終的には、編集者、作家の判断。まるっとスルーされたこともあります(笑)。新書にも関わりましたが、こちらは、研究者の方の執筆が多く、作家さんとはまた異なるこだわりを発揮されます。あるいは、御社との仕事では、取材を経たライターさんが書かれたものなど、それもまた質が違います。いずれにしても、校閲

お願いしています！

編集後記



▼紙メディアが面白い。ひろげれば、肩幅よりひろいこのサイズ感。ロートルグラフィックデザイナーとしては、やはり楽しい。▼こんなことが出来ちゃうのは、印刷の小ロット対応と低価格化。本紙の場合、100部で1万円未満、仮に千部でも2万円。加えて、デザイン編集アプリの進化、驚くべきAI支援。いずれ、僕らにとって必要になること必至。(笑)▼ということで、弊社のお正月新聞いかがでしたか。リキさんこと鈴木力さん、鈴木聡さん、高松恭則さん、急なお断いを快諾していただき嬉しかった。本当にありがとうございました。▼本紙、まるで来年もやりまします風につけていますが、正直、お約束はできません。なぜなら、思ったよりたいへんでしたから、ええ。▼ま、でも、一応、来年も乞うご期待！(芹)

▲水曜日はリモートデー。



デザインが、とっても上手。

総メンバー4名のちいさな会社ですが、カメラマン、コピーライター、編集者、校閲者、Webエンジニア、Webマーケターなど、頼りになる多くの外部スタッフとタッグを組み、デザイン力と提案力をウリに、グラフィック(紙媒体)とWebの両方をまたぐ案件を、総合的にお手伝いします。ぜひ、ご相談ください。

エムキュウデザイン

m9design



次号は2027年お正月、乞うご期待！